

注目演題
Pick up!

Scientific Meeting

第83回 日本皮膚科学会東京・東部支部合同学術大会

2019年11月16日～17日 京王プラザホテル

会長：石河 晃(東邦大学医学部皮膚科学講座)

奥山 隆平(信州大学医学部皮膚科学教室)

テーマ：Derma First

MSY2-1

美容の基本、洗顔 ～“たかが洗浄”にあらず～

高木 豊

花王株式会社スキンケア研究所

Summary

皮膚洗浄は古来より日常生活に深く浸透した習慣であり、洗浄の対象は疎水性のものから親水性のものまで多岐にわたる。一方、不適切な洗顔は皮膚の乾燥や炎症、萎縮などを引き起こすことから、洗浄剤を選んで正しく洗浄することが必要である。

皮膚洗浄剤はおもに界面活性剤、安定化剤、増粘剤、pH調整剤、エモリエント剤などにより構成されており、イオン性界面活性剤であるアニオン界面活性剤が主基剤として配合されている(オイル系メイク落とし洗顔料の多くは非イオン界面活性剤を主基剤とする)。界面活性剤の浸透、角層内成分の溶出には界面活性剤の角層蛋白質への吸着・変性が関与するため、その低減が求められる。界面活性剤はその構造により洗浄能が同等でも、蛋白質変性度が異なる。たとえば石鹼(脂肪酸塩)よりもアミノ酸系界面活性剤であるアシルグルタミン酸のほうが変性度が少ない。また、同じ活性剤でもpHによりその作用が異なる。さらにアニオン活性剤同士や両性界面活性剤と組み合わせることにより変性度が変化する。エモリエント剤などの添加によっても変性度は変わる。した

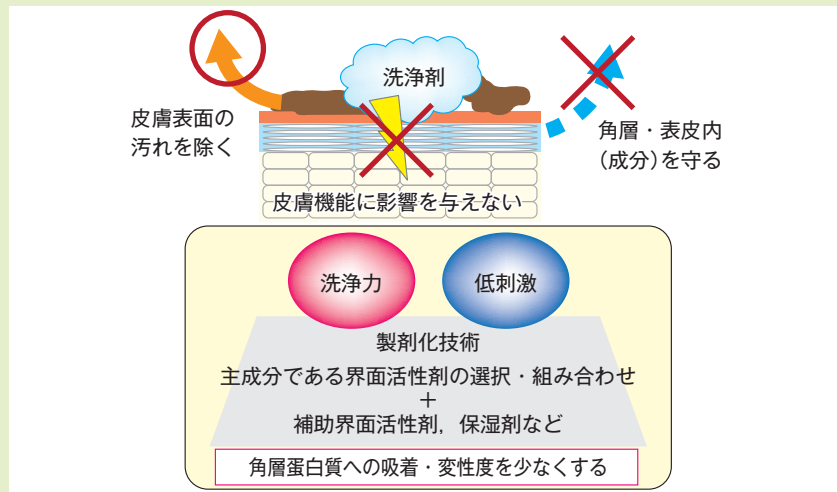


図1 理想的な洗浄剤とその調整手段

(筆者作成)

がって、界面活性剤の選択、組み合わせ、pHの調整、添加剤の検討などにより、高洗浄能でマイルドな洗浄剤が調整される(図1)。なお、蛋白質変性の低減は、活性剤のミセル/モノマー比の増加が一因であると考えられている。

洗浄剤の選択に加えて、①適切に希釈し、②十分泡立てて、③皮膚をこすらず、④十分にすすぐことが重

要である。最近、市場にみられる泡状の洗顔料の使用も推奨される。低刺激な洗浄剤で皮脂を十分洗浄することは痤瘡の予防、悪化防止にも有効であり、また、荒れ肌も誘導されないことが確認されている。

洗顔は“たかが洗浄”と考えがちではあるが、最も基本的なスキンケアであり、洗浄剤について理解を深め、適切な洗顔を行うことが重要である。